

絵本 Vol.10

いいね!

今回の「いいね!な絵本」は

『あたたかい木』

くすのきしげのり 作
松本春野 絵

星の環会



今回のいいね!な絵本は、星の環会『あたたかい木』をご紹介します。
大人に向けた小説が原作の、この絵本。
山奥にある「あたたかい木」をめぐる起こる出来事に、
人が生きることの本質を読み取れる物語です。絵を担当された松本春野さんは、
ほがらかに周囲を包み込む印象の人。彼女に、作品の魅力や制作秘話をうかがいます。



松本春野さん

どんなものにも排除されない、あたたかい居場所を



『あたたかい木』は、主人公の植物学者が山奥で、いつ何時もあたたかい、不思議な木を見つけて、やがて大切なことに気づくお話です。



本作では、大人向けの小説を、子どもから楽しめる絵本にしていますね。

そうですね。くすのきさんの物語は、目先の利益にとらわれた若い植物学者が「あたたかい木」という大きな存在に出会って、変化する姿を提示しています。「人が生きる上で大切にすべきものは何か」がテーマです。大人でないと理解しづらい内容ですが、それを絵本にするとなった時、絵描きの私には、絵の力によって誰にでも分け隔てなく物語を感じさせる役割があると考えました。

絵の中では、たとえば、画面の隅々までしっかりと光を描きよう努めています。ページを開く子どもたちが、ふりそそぐ光に「どんなものにも排除されない、あたたかい場所」の存在を感じてくれたらいいなと思うんです。いろんな動物たちが共存する風景も、その豊かさを伝えようとしています。



この絵本はおしゃべりな私がぐっと我慢した仕事でもありません。人とワイワイやるのが好きな私は、絵も同じくおしゃべりで、放っておくと描き込みたくなるタイプ。でも今回は、主人公たちの物語るものに明確に焦点を絞って、描き方に強弱をつけました。森の木の葉を抽象的に表

したのは、そんな工夫の一つですね。こうすれば、はっきりと描かれた登場人物たちにおのずと視線が注がれます。毎朝、毎夕、娘を自転車で幼稚園に送り迎える道で、近所の植物園の緑を眺めて、表現の仕方を考えました。

他の方の文章に絵をつけるというのは、自作の文の場合とは違って、慣れたやり方を封じる分、新たな工夫を問われます。くすのきさんの文章は言葉がすでに情景をよく伝えていきますから、絵描きとしては絵が文章の説明に終始してしまわないよう考えなければならず、試行錯誤しました。納得いくまで手直ししたところがいくつもありましたよ。なかなかよく描けると「よし!」とガッツポーズです。

そうだったのですね。植物学者も動物も、表情が豊かだと感じました。

ありがとうございます。植物学者や動物たちの表情やしぐさによって、文章に描かれていないものまで読み取れるようにしたつもりです。

描いている時に、私はいつもこの物語にほっとしていました。なぜかという、最初から立派な人などいないと確信できるからです。自分が多感生だったので、余計そう思うのかもかもしれませんけれどね(笑)。植物学者は最後には、みんなに慕われるおじいさんになります。でも、初めから人格者だったわけじゃない。それに、もしもしたらあたたかい木だった、昔はひろひららと細くて弱い木だったのかも知れないでしょう? 土に守られ、雨が降って、周りの動物たちが寄り添ってあたたかみを与えてくれたから、そうなれたんじゃないかと私は思います。言葉で書かれていなくても、そんな過去があったって不思議じゃないですよ。本は読者のものだから、もちろん想像の行く先はこの限りではありません。植物学者や動物の姿から自由イメージを膨らませてもらえたらうれしいです。

いいね!な絵本を作った人

松本春野さん

絵本作家、イラストレーター。絵本作品に『Life(ライフ)』(作・くすのきしげのり 瑞雲舎)、『おばあさんのしんぶん』(作・岩間哲人 講談社)など。近著に絵と文を書いた体験的ファンタジー『ノちゃんとうまのおはなし』(清流出版)がある。



思えば、今回の絵本作りもみなさんに支えられて育った「あたたかい木」のような仕事でした。実は私は、くすのきさんとは直接のやりとりを知らないんです。文章を書いた人のお人柄を知り過ぎないのが、絵描きが想像をよく働かせるには大切だと考えてのことですが、これにしても、くすのきさんと私に、編集の和田さんへの信頼感がなければ成り立ちませんよね。一冊を完成させるにはたくさんの人の力が合わさっています。今回は印刷面でも、デザイナーの水崎さんやプリンティングディレクターの方に原画の色味を再現する細やかな努力をいただいたので、本当に助かりました。みんなが補い合って絵本というミニマムな媒体は完成すると思っています。

最後に、読者へメッセージをお願いします。

子どもにも、絵本をすっかり忘れた大人にも、開けば居場所ができるような作品に仕上がったと思います。優しい光と空気に、あなたの読み方で自由に触れてみてください。

松本さん、ありがとうございます。





『あたたかい木』『海の見える丘』のお求めはお近くの書店等にお問い合わせください。



絵本から吹く 「あたたかく清々しい風」を感じて

くすのきしげのりさん



いいね!
な絵本
を作った人

くすのきしげのりさん

児童文学作家。絵本の作品に『おこだでませんように』（絵・石井聖岳 小学館）、『ええところ』（絵・ふるしようこ 学研）、「いちねんせい的一年間」シリーズ（講談社）など多数。100タイトルを超える児童文学作品は日本および海外で広く読まれている。



星の環会
A5判変型 208ページ

著・くすのきしげのり

『海の見える丘
あなたの未来へ贈る5つの短編集』

研ぎ澄まされた言葉、斬新なレイアウト。読み手の想像力で完成する5つの物語が収録された短編集。

『あたたかい木』は、「5つの風の絵ものがたり」と銘打った絵本シリーズの1冊です。2019年の春に刊行したイラストなしの短編集『海の見える丘』ここに収録された5つの短編を、5人の画家に依頼して、それぞれの物語の「風」を感じられる絵本にしようというシリーズ企画です。
松本春野さんとは、「Life (ライフ)」という絵本でも作と絵とでこいっしょしましたが、今回も、やさしさと光あふれる絵で、すばらしい絵本に仕上げてくださいました。
読者のみなさんには、絵本から吹く「あたたかく清々しい風」を感じていただきたいですね。読んだあとは、きつとだれかにとっての「あたたかい木」のような存在になれるのではないのでしょうか。それが、はじめて私が「あたたかい木」という作品を書いた20代のころからの、変わらぬ願いです。

和田千春さん



いいね!
な絵本
を編集した人



和田千春さん

フリー編集者。出版社勤務を経て2012年よりフリー。現在は絵本を中心に手がける。星の環会ではシリーズ「5つの風の絵ものがたり」全5冊のほか、『ようかいオリビック』（作・めくろみよ）を担当。

繊細な原画の再現を プリンティング ディレクターと

松本さんの絵は繊細で、自由です。光の加減や温度まで印刷で感じさせてほしくて、プリンティングディレクター(PD)さんの協力をお願いしました。PDは、作家(やデザイナーや編集者)の思いを印刷の現場に伝え、技術的な裏づけをもって実現をはかるプロ。作家とPDが原画を前に共通のイメージをもってスタートすることができたので、「ここは夢なので、夢のように」などというニュアンスまで(笑)頼もしく引き受けていただき、満足のいく仕上がりになりました。

水崎真奈美さん



「画」の声を聞き取る 作業がデザインの 出発点

私のデザインは、「画」から発せられる声を聞きとる作業からはじめます。ふと映像として降りてくるイメージ。これがなかなか降りて来ないときは難儀です。今回の『あたたかい木』は、森の風も感じられ、植物好きな私にとって、とても楽しいお仕事でした。プリンティングディレクターに印刷の色だしを委ねることができたのも、それはそれは心強かったですね。絵本の仕事を重ねるたびに奥深さを知り、もっと絵本をつくりたい!と感じています。

いいね!
な絵本
をデザインした人



水崎真奈美さん

福岡県生まれ。ブックデザイナー。1955年に上京。主に書籍の装幀、絵本のブックデザインの仕事をしています。プライベートでは、屋号にもしている「BOTANICA」や「蓮」をテーマに作品を制作し、たびたび個展を行っている。

池浦宏治さん



作家の想いの実現につとめています

『あたたかい木』の原画は、水彩画です。この描き方は通常でも淡い色彩の再現に気を使いますが、今回の絵はクリーム色の紙地に施されており、さらに注意を払う必要がありました。また、松本さんご自身は、こうした淡い調子のデータ再現がご自身ではうまくいかないと話しをされていました。私たちは松本さんとの打ち合わせで、ヒアリングによって課題を細かく抽出していきました。その結果、絵本では原画の色調をよく再現できたと思います。プリンティングディレクターとして、作家の想いを印刷で表現できた実感の湧く作品でした。

いいね!
な絵本
を印刷した人

池浦宏治さん

図書印刷株式会社所属、プリンティングディレクター。製版で長らく画像処理に携わってきたから現職に。多様な原稿での経験を活かし、お客様の目指す最終到達地点をともに達成するべく、日々奮闘中。

